

現代児童文学の底流

——平仲物語の笑柄——

中 田 武 司

一

現代日本の児童文学作品、特に童話に欠けているものは「ユーモア」であるといわれる。

「架空的なものと、実在するものとが混融している」という次元の同一化は童話の特徴であるが、その中に描き出される「ユーモア」は著しく観念的な要素を生命とした「ユーモア」でしかないのが普通のように思われる。しかも現代作品の中で描かれる「ユーモア」は人間を客観的な立場におく「写実小説体」の中に多く描かれているように思う。

ところで、現代の人間を客観的立場において描いたといわれる長編物において、児童文学評論家が「現

代的で、新しい感覚の作品」と評する多くの作品は、その筆の延びにおいて小波の「こがね丸」の域を脱し得ないでいるものが何と多いことであろうか。力めばそれ丈に、作者の三文イデオロギーの筋書きしか浮んで来ないものの何と多いことだろうか。竜之介の「杜子春」、バーネットの「小公子」、更にはルネ・レヅジャーニの「あした、あさって」に続く「バルドビーノのふしぎな冒険」などにみられる新感覚的筆の延びがみられないのである。一例あげれば国分一太郎氏の「鉄の町の少年」、古田足日氏の「瑞穂の国ゼロ時間」をみても一目瞭然であろう。これら引例の作品は決して成功した作品とは思われない。

勿論、児童文学のジャンルにおける形態の問題は見方によっては諸々問題もあるが（拙著「児童文学要覧」児童文学の形態参照）現実のところ、いわゆる少年少女小説といわれる童話とが同居の形をとっているのだから、作品の長短の問題はここでは割受する。ただ、本「紀要」の創刊号「女房文学序説」（昭40）でも述べたように、わが国における教育の第一歩が口伝えによる民間伝承にあったこと、更にこれがようやく文字化されると、まずその任に当たったのは家庭の女房―刀自―であったこと。更にこの方法と形態は、二十一世紀を迎える現代において宇宙開発という科学の進歩があっても、その教育の根本においては、さして変化があるものとは思われないのである。

グリム文学の基をなすザーゲ[△]と[▽]と同様にわが国の文学の基は柳田國男氏の業績において明らかな如くに、いわゆる口承文芸にその源を求めることができる。口承から文字化され一段と強く、その根を家庭におろすようになり、大人の口碑は、結果的には対照を

子弟に求め古典童話として展開して来た。すなわち大人自身の口碑は存在しにくく、大人への譚は、すべて子弟のための教育的素材として敷衍して来たものといえるのである。「源氏物語」にしても、更にまたそれを感じに訴える絵巻にしても、「かげろう日記」にしてもそのほとんどが、こうした過程で文字化されたものといえる。特に「絵巻」の類は多分に現代の漫画的価値が主であったともいえよう。

二

中古の歌物語に「平仲物語」がある。この物語はその名の示すように「平貞文」らしき人物を中心として展開されている物語である。（注1）

この時代の作品には多少、その数に異同こそあるものの、異本伝本のあるのが普通だが、「平仲物語」は現に静嘉堂文庫所蔵本の一本のみで他に伝本を聞かない物語なのである。もっともその断片態や、抄話は全くない訳ではない。

この物語は形態的には伊勢物語や大和物語などの系

列に連なる歌物語である。そして、「伊勢物語」が「在中将日記」とよばれた如く、「平仲物語」は河海抄（夕顔巻）に示すように「貞文日記」ともよばれていたらしい。このように、物語と日記とが同一内容のものであったことは、小野篁物語と「篁日記」、多武峯少将物語と「高光日記」、和泉式部物語と「和泉式部日記」とが同一のものでありながらその名称を異にするような例は多く、「かげろふ日記」の中にもこうした同一体のあることは以前に述べたことがある。（白梅紀要創刊号昭40）

ところで、平仲物語（第二段）には次のような物語が展開されている。

此ノ男（平仲）ガ コリシヨウモナク 言イヨツタリ言イヨラナカッタリシテ
「この男のこりずまに いひみいはずみある
イル 女ガアツタ （ソノ女ガ）マア コノ男ヲ 嫌ダトハ
る 人ぞありける。それぞかれをにくしとは
思イステシマワナイモノノ 手紙ノ返事モ シナカッタノデ （コノ
思ひはてぬものから、かへり事もせざりければ、こ
男）「コノサシアゲマス手紙ヲ（アナタガ）ゴランサイマスモノナラバマ
の 奉る 文を見給ふものならば、た
トモナゴ返事ハクダサラナクトモセメテ「見タ」トダケハオツシヤツテクダサ
まは ずただ みつと ばかりは のたま
イ」トマア イイヤツタ ソコデ（女）「見タ」トマアイツテ ヨコ
へとぞ いひやりける。さればみつとぞいひやり

シタ事ダ
ける。」

この素気無い女の返事が当代の男女の道德観からみると、如何にもめずらしい行為であつたらしく、これが「見つ問答」として説話化され、他の物語の中にも採られたりしているのである。そしてその話者の相手は源氏物語（末摘花巻）で「雛（ひひな）あそび」をしている幼い紫の上に源氏が「平中がやうに色どり添え給ふな、赤からはあへなん」（注2）と話している例をみても明らかなように子供に対する話でもあったのである。

勿論前引の話の相手の女性は立派な女性である。そしてこの女性のモデルは山岸徳平博士の説かれるように「伊勢の御」（日本古典全書「平中解説」）であつたのである。これは伊勢集をみると、

「こゝら年月になどかみつとだにの給はぬと云ひければ見つとぞ云ひたりける」（伊勢集、国歌番号一八二二の詞書）

として平仲物語とは立場を変えて、同一事件を女の立場で描く発想となっている。(注3) このように明確な相手の女性であるにもかかわらず後、今昔物語三十(本朝部)が「平定文仮借本院侍従語」としてこの女性を伊勢とせず「本院侍従」としているのははじめ、宇治拾遺物語、古本説話集、十訓抄、世継物語などにもそのまま説話化して収められているのである。

かくして、伊勢と貞文の関係は、女性の立場からみると、いかにも「間抜けた」姿の貴公子像が浮び出るのであるが、この人間像は、他ならぬ女性Ⅱ女房の思想の反映と受けとることができる。

手紙の返事を書くのが嫌いなら、せめて「見た」と書いてよこして欲しいというと、来た手紙の「見つ」という部分を切り取って貼り、それを返事にするという譚はその展開の中に鋭いアイロニーがある。「デカメロン」や「神曲」よりもはるかに長編の「源氏物語」の中には先にみた末摘花巻の会話のような「ユーモア」と「あわれ」との両面が常に描かれているのであ

る。この源氏物語の長編の思想は短編においても継続されているといえよう。ただ短編においてこの両面が描き切れない時には「ユーモア」を印象的に構成する努力をしているものが多い。

平仲物語は中古の作品であるとはいうものの現代に生きる物語であることの差証には事欠かない。例えば竜之介の「好色」、潤一郎の「少将滋幹の母」の主人公はとりもなおさず平仲のイメージの再現である。しかしながら竜之介や潤一郎にのみ好まれた素材をその主眼とするのが平仲物語ではなく、その真髄は女房がその子弟への教材とするところにあったといえるのである。これに似て現代の創作品もその目的とするところは、家庭という場への浸透である筈なのに、これが不足しているように思われるのである。その不足の原因の第一は児童不在の童話が多いことであり、更にならば作者が、写真描写にのみ力みすぎず、もっと浪漫的手法でニュートラなる思考、すなわち「場」の把握を客観的に描くことが必要といえよう。

単に読んで解る主義ではなく、平仲を読みそれを女房が自己の膚を通じて実践し利用した如くに、教育の素材となり得るに十分なる作品の構想を立てて筆を取ることが必要なのである。それがためにはまずは現代作品の多くにみる、鼻につくイデオロギーの発想をすべて、ユーモアに置き換える位いの寛容性が欲しいものと思う。この寛容性こそ家庭での童話の「場」を広げる手法であろうし、その中に教育の素材を見出すところに真の児童中心の場が開けるものと思う。そしてそこには親の口承による機知とユーモアが生かされるものと思う。この寛容の場の設定は鈴木三重吉が漱石に学び、しかる後に「古事記物語」や雑誌「赤い鳥」の業が生まれた例をみることによって明らかにあらう。

現代の児童文学作品に欠けているのはこの「場」の設定の研究と、素材の分析・総合という方法であるといえないだろうか。これを補うためにはまずはその足場にみる古典に学ぶ心掛けを忘れないことが肝要であ

らう。その笑柄の一例を平仲物語にとり紙枚の関係で現代児童文学作品の底流を断片的にとりあげてみた次第である。
(四三・八・一五)

注1 平仲は静嘉堂所蔵本には「平仲物語」とあるが「仲」か「中」か正確なところは不詳である。「仲」を「平貞文、字仲、因号平仲」と説いたのは北村季吟の大和物語抄(一六五三)である。ただ平仲が平貞文(古今集には「さだ(定) ふん」)であることには考証の余地があるものと思う。

注2 現存本平仲物語にはみえない物語であるが、平仲が女のもとにかよい硯の水で目を濡らして自分の切ない気持ちを伝えようと演技したがこれを見破って例の水入れの中に墨を入れておいた。これをしらずに平仲が同じように目を濡らして泣いたところ今度は顔が真黒になった、という失敗談を幼い紫の上を相手に遊んでいる中で話している。

注3 この内容は伊勢集、国歌大観番号一八二二二〜一八四二八の歌参照。